

平和をめぐる、さまざまな視点から議論が繰り広げられた第4回宗門教学会議。(左から) 丘山願海、藤丸智雄、古賀茂明、小原克博、小林正弥、徳永一道、満井秀城各氏



宗教と平和

武器なき平和の可能性を探る

平和について宗門全体で学び、議論し、行動していくための資料「平和に関する論点整理」(中間報告)が昨年12月、本願寺派総合研究所によってまとめられた。12月16日にはこの論点整理をもとに第4回宗門教学会議「宗教と平和—武器なき平和の可能性」が伝道本部で開かれ、元経済産業省官僚の古賀茂明フォーラム4代表と小原克博同志社大学神学部教授が登壇、「白熱教室」で知られる小林正弥千葉大学大学院教授が進行した。ナショナリズムと宗教、憲法改正、集団的自衛権、仏教の社会性などの論点をめぐる議論のあらましを紹介する。

第4回宗門教学会議

問題点を整理し議論、新たな一歩に

ご門主お言葉

有識者の方のお話を通し、宗門と宗門人として、私たちの歩む道を考えていただきたいと思います。
宗祖親鸞聖人は、出家者のための教えとしてではなく、さまざまな仕事をもち、生活をする在家者へ浄土真宗のみ教えをお説きになりました。つまり、さまざまな課題や悩みを抱えている人の生きる依りどころとなるのが、浄土真宗のみ教えであります。み教えが多くの方の心に届くためには、教えの伝え方を私たちが工夫しなければなりません。
社会の問題は多面性を持ち、複雑化している場合が多くあります。単純に解決を図ることは難しく、そのことによつて他の問題を生み出す場合もあります。私たちに大切なのは、まず社会の問題に関心を持つこととあります。その上で多様な意見を聞き、考え続けることが重要です。そして私ができることをすることしか、解決方法はあります。
今日のお話を通して、テーマであります「宗教と平和—武器なき平和の可能性」について思索を深められ、宗門の歩みへとつながりますことを期待しております。(一部省略)

ご門主のお言葉(右)に続き、石上智康総長が「このたびの『平和に関する論点整理』では予断と偏見を排除し、平和に関する問題点の所在をトータルとして整理し、宗門全体で学びが深まることを主眼としました。建設的な平和への取り組みの機縁となることを期待します」と挨拶した。

●登壇 ●古賀氏

まず古賀氏が登壇。日本の政治状況に触れつつ、安保法案の成立などによって「非常にはっきりと平和主義をとっていた日本の外交政策が大きく転換されたという報道が、ほとんどの国でなされている」と指摘した。
「こんなに戦争の怖さがわかる時代はないのに、日常的なものになってしまった。人間は生き物であり自分を守るという本能があるから、それが拡大していくと、自分を守るための戦争もしかたないという論理につながる。しかも人間は不完全で必ず間違った認識をしてしまう。人間がいかにどうして平和は来ないし、絶対的平和はないと思うか、それでも平和を求めていくというプロセスが平和主義」とし、「武力をなるべく使わないで平和への努力を続けることが本当の意味での平和主義ではないか。今の政府の考えは『積極的軍事主義』にすぎないのではないか」と話した。

●登壇 ●小原氏

小原氏はまず、宗教とナショナリズムについて語った。
「自己犠牲を正当化するための、あるいは死を美化するような論理が国家、宗教にも共通してあったのではないかと述べ、戦時教育の過ちについて『世俗的権威を積極的に正当化していく。みずからその一部になることで自己正当化を図っていく、自らの存続を図っていく道を選んだ。残念ながら、日本の宗教すべてに当てはまった』と指摘。さらに、『リベラルな知識人たちは時代の流れに簡単に迎合し、社会の変化に対応させながら自ら善き込まれていった。ドイツにおいても日本においても、自らの信念、信仰に忠実であった時に、時代がもつ魔法的な誘



古賀茂明氏

こが、しげあきフォーラム4代表、古賀政策ラボ代表、へいわフォーラム2015(御同朋の社会をめざす運動)東京教区委員会主催 講師



小原克博氏

こはら、かつひろ同志社大学神学部教授、同志社大学良心学研究所センター長、専門は宗教学、比較宗教学、キリスト教思想

引の力から逃れ出ることができた」と話した。
また、「利他心が国家のもとは不殺生ではなく暴力へと向かうのはなぜか」と問いかけた。「一人一人がただ自分のために生きるのではなく、人のために、自分が住んでいる社会のために、できれば自分が住んでいる国家のために生きたいという思いは素朴な感情として、だれも持っているもの。しかし、こうした小さな良心も、いうものが大きな良心を生み出すのではなく、巨大な悪のメカニズムを生み出した」と語り、その典型的な例としてナチスドイツを挙げた。
その上で、「宗教というのはしばしば個人の心の問題、心の内面を扱うが、内面における平和だけを扱うが、内面における平和だけを

を論じていても、社会とか国家の平和には至らない。個人のレベルの問題と社会の次元における問題はかなり違う構造を持っているため、ある種、社会性に関わるようなチャンネルをその宗教が正しく持っているならば、国家は個人の良心心というものを利用する場がある」と述べた。
このほか、原理主義や共同体の論理にも言及しながら、「時代と世帯を超えて依るべき原理がどこにあるのかというところを、きちんと確認していくことは大事。それがあってこそ、国家が出すさまざまな施策を相対的に批判的にみることも可能になる。この原理は単一のものであるという必要はなく、むしろ多様であればあるほど力を増していく」と語り、「仏教

社会の問題に関心持ち、多様な意見聞き、考え続ける

テーマ絞り 議論深める

テーマに踏み込んでいく形で小林氏が問題点を整理し、議論を深めた。
憲法改正について古賀氏は、「自衛隊ができるのは攻撃された時の反撃という解釈になっており、それはそのまま堅持すべきだと思う。例えば『自衛のための軍隊を保持する』となれば、保持することが憲法上の要請となり、軍隊を持たなければならぬ、守るに足る強い軍隊でなければならぬ」という話になる。と危惧を示した。
その上で、人間の自由な意思の大前提となるのは「正しい情報を得られているか」と指摘。「言論への弾圧は常に起きているが、メディアがそれに対抗するという姿勢を示してきた。しかし、政権側が圧力をかけた。国家が介入することによってマスコミが自衛、付帯するようになる。問題をあぶり出し議論を提起する、批判するということを抑えていく方向に自ら進んでいくことになり、マスコミは能力を失う。マスコミが機能

◆正しい情報

大前提となるのは「正しい情報を得られているか」と指摘。「言論への弾圧は常に起きているが、メディアがそれに対抗するという姿勢を示してきた。しかし、政権側が圧力をかけた。国家が介入することによってマスコミが自衛、付帯するようになる。問題をあぶり出し議論を提起する、批判するということを抑えていく方向に自ら進んでいくことになり、マスコミは能力を失う。マスコミが機能



平和に関する論点整理
宗門全体の平和への意識を高めると同時に、予断と偏見を排除し、具体的には平和問題について学びを深めていくための資料。本願寺派総合研究所がまとめた。
「仏教のめざす平和は何か」「戦争、紛争の現実と、それに対する平和構築について」「それらを踏まえ、念仏者がいかに行動していくか」という3つの柱からなり、これらについて問いを設定、多様な意見を提起する形となっている。
論点整理(中間報告)であるため、宗門の最終的な見解を示すものではない。
「宗報」11月・12月合併号に掲載。

宗門教学会議

宗門の活動の方向性を考える重要な会議で、毎年1回開かれている。宗門が当面する諸問題、宗門内外から提起される現代的課題や、現代社会の思潮、動向の分析把握などについて提言する。
座長(本願寺派総合研究所長)、総長が指名する有識者2人、研究所長が指名する有識者2人で組織する。

◆社会性と倫理性

こうした意見に対し、勸学寮頭徳永一道氏は「宗教者は社会の問題に口を出すな、仏教は守ってやるから政治の問題に口を出すな」ということで、江戸時代には宗門の教養は異常に発達した。明治政府もそれを利用した。真俗二諦的な発想は当たり前だと思いつつ、太平洋戦争にも協力した。それを反省したにもかかわらず、宗門にはいまだにその発想が残っている。浄土真宗の信仰は往生の問題であり、阿弥陀如来に救われていくということだが、宗祖が明らかにされた他力の信心というものは社会性というものを無視した。私だけの救いの問題なのか」と指摘。総合研究所副所長の満井秀城氏は「正義というものを仏教では持たない。だから正義のための聖戦といふことはないが、真俗二諦という発想によってダブルスタンダードとなり、世俗権力の論理を暴走させてしまった」と話した。

◆ナショナリズム

さらに小原氏は日本のナショナリズムについて言及。「愛国心と3・11との関係がよく指摘されてきた。絆という言葉に乗っかる形でさまざまなナショナリズムが出てきた。今も国家として危機に対応するという流れの中にあり、政治の右傾化とかその現状に対し、社会は結果として十分な批判力を発揮できなかった。逆に、保守系の政治家がこの状況を巧みに操作して利用した」と指摘。宗教との関係については、ナショナリズムに迎合した歴史の反省とともに、「国家に吸収されたり、道具化されたために何が何でもかということだが、問題はナショナリズムを相対化するような明確なイデオロギーが日本社会には見当たらない」と話した。

◆宗教者の役割

宗教者の役割について古賀氏は「仏教者、宗教者としてできることは、国家というものを介さないで、門徒あるいは市民との関わりを深め、それを世界中に広げていくこと。一つの宗教あるいは宗派としての活動と、そういう活動を国際的に他の宗教、宗派と連帯していくことで戦争の歯止めを作れるのではないかと話した。
小原氏も「平和主義者というものは、いつまでも絶対的に少数派であることは間違いない。しかし、それを自覚し、この世にあら

◆集団的自衛権

集団的自衛権について古賀氏は「すべての国が個別的自衛権しか行使しないと同意すれば、戦争は起らないはず。武器を持つことによって戦争が防がれているということだが、自衛の戦争ということであるならば、これを自覚し、この世にあら

◆現状をつくるもの

また、同研究所副所長の藤丸智雄氏は「現状は少しずつ平和に近づいているという見方もある。理想的には個別的自衛権も集団的自衛権も認められないが、現状の平和をつくるというものという評価もある。ここからさらに進むために、心の中に平和をつくるという宗教的なアプローチが大きな力になり得るだろう。しかし、それは数十、数百のニューの1つであり、これだけで極端に事態が変わることは思えない。集団的自衛権は簡単に肯定できないが、論点整理でも分析したように、平和構築の歴史の中で評価すべきだ」と意見を述べた。